法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-13

環境思想のアンティノミー構図

竹内，昭

(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
言語と文化 / 言語と文化
(巻 / Volume)
7
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
26
(発行年 / Year)
2010-01-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005677

Hosei University Repository

環境思想のアンティノミー構図

竹内　昭

一

環境問題に関するさまざまな議論が登場してすでに三十数年が経過した。それとともにマス・メディアで環境問題が取り上げられない日はないほどになり、自然に対する、ないしは自然に関する人間の責任として不可避の課題になった。しかしこうした問題は、事柄の性質上多岐にわたっていて複雑だったり、現象に対する視点も目まぐるしく変化したりしている点も見逃せない。さらには、同じ現象に対しても、悲観的な見方と楽観的な評価とが混在していたり、場合によってはまったく正反対の評価がなされたりして、全体の見通しが必ずしも明確ではない。ここでは錯綜した環境問題を概観し、哲学的・倫理学的な思想の観点から整理してみたい。

環境問題は地球規模の課題であり、したがってグローバルな視点で捉えなければならない。しかし他方では、これは個々人の意識の問題であり、自らが立脚する身近なローカルな問題に即して考えなければ無意味である。広い視点を土台にして、そこに身近な意識を育まなければならない。身近な問題意識をもつためには、まず考え方、言いかえれば思想的な基盤を涵養しなければならないということである。

実際、私たちをとりまく環境問題は錯綜している。対象が多岐にわたっているし、切り口・論点も多様である。

Hosei University Repository

また、深刻派と楽天派、あるいはそこに批判派・懐疑派が介入して入り混じり、さらに複雑さを呈している。批判派・懐疑派は、すでに環境問題がいわれるようになったかなり早い時期から少数ながら主張されているが、この数年にいたっては、かなりの勢いで台頭してきた。

考え方の多様性の点でいえば、たとえば、環境を閉鎖系と見なすか開放系と見るかによって生態系の物質循環とエネルギーシステムとの関係を見なければならない。また、生活に密着した環境の面では、開発か保護（あるいは保全）かの視点から、還元論か全体論かの対立も見えてくる。さらに、環境における人間のおかれた場の解釈の違いから見れば、倫理の視点を取り入れるか科学の解釈によるかという争点が生じ、人間中心主義か自然中心主義かの論争も生ずる。あるいは、環境を必然的・絶対的な視点から見れば、宗教的な感情を入れる余地があるし、他方、環境を偶然的・相対的な現象の系列と見なせば、もっぱら科学精神による解決が導入される。

こうした環境問題に関する錯綜した実態は、何らかの形で整理しなければその全体像が見えてこない。そのために、ここでは環境思想のさまざまな論調を身近な言説から概観し、そのトレンドを図式化してみよう。

二

こうした錯綜した視点を整理するためには枠組みが必要である。ここでは試みにカントのアンティノミー（二律背反）論を援用し、その構造を土台にして環境思想の論点の多様性の整理を試みる。*

* 環境思想に内在する相対立する観点については、論者はすでにある論考（「もう一つの〈世代間倫理〉の試み」文献①）で、その二項対立をパラドックスないしディレンマとして、そのさわりをあつかっているが、ここでの考察は、その視点を別の切り口からさらに発展させ拡大したものである。

カントは、純粋理性、すなわち人間の認識をつかさどる理性はアンティノミーに陥るという。アンティノミーとは、「人間理性の本性に根ざしたものであり、したがって人間理性にとって避けることのできない、またいつになっ

Hosei University Repository

ても終わることのない矛盾」（『プロレゴメナ』§51、文献②、カントの著作文献は以下同様）のことである。要するにアンティノミーとは、私たちが世界そのもの、あるいは世界に生起する現象を認識する際にはたらく、不可避の相反する二つの見方のことといっていい。

純粋理性の陥るこのような自己矛盾の実態を、カントはその主著『純粋理性批判』で四種に分けて表示し、こと細かに論じている（第二版、原版頁付B448）。ここではその詳細な議論は省略して、その骨子のみをまとめればつぎのようになる。

第一アンティノミー

正命題　世界は時間的にはじまりをもち、また空間的に関しても限界の内に囲まれている。

反対命題　世界は時間的にはじまりをもたず、空間的にも限界をもたないし、また時間的にも空間的にも無限である。

第二アンティノミー

正命題　世界における合成された実体はすべて単純な部分から成っており、だからおよそ存在するものは単純なものか、さもなければ単純なものから成る合成物である。

反対命題　世界におけるいかなる合成物も単純な部分から成るものではなく、世界にはおよそ単純なものは存在しない。

第三アンティノミー

正命題　自然の法則に従う原因性は、世界の現象をすべて導く唯一のものではない。現象を説明するためには、なお自由による因果性を想定する必要がある。

反対命題　およそ自由というものは存在せず、世界における一切のものは単に自然の法則によって生起する。

第四アンティノミー

Hosei University Repository

正命題　世界には、その部分としてかさもなければその原因として、絶対に必然的な存在者であるようなあるものが存在する。

反対命題　およそ絶対に必然的な存在者などというものは、世界の原因として、その内にも外にも存在しない。

この四つのアンティノミーを、カントは、自らによる『純粋理性批判』の解説書・簡約版である『プロレゴメナ』でつぎのように要約し再説している（§51）。すなわち、先に掲げた人間の考え方の本性に根ざす相対立するものの考え方を簡略にまとめればつぎのようになるというのである。

一　正命題　世界は、時間および空間に関してはじまり（限界）をもつ。
　反対命題　世界は、時間および空間的に関して無限である。
二　正命題　世界におけるすべてのものは、単一なものから成っている。
　反対命題　単一なものは何もなく、すべては複合されている。
三　正命題　世界には自由による原因がある。
　反対命題　およそ自由というものは存在せず、すべてのものは自然である。
四　正命題　世界原因の系列には、何らかの必然的存在者がある。
　反対命題　この系列には、必然的なものは何もなく、すべてが偶然的である。

それをさらにまとめれば、要するに第一に、世界そのものは有限か無限か、第二に、世界の現象は単一体か複合体か、第三に、世界の現象の原因性は自由か自然必然性か、第四に、世界には偶然的なものしか存在しないか絶対的なものが存在するか、という四種のアンティノミーに分類されるというのである。

以下、ここではこの『プロレゴメナ』の簡約版に即して検討しよう。

Hosei University Repository

カントによれば（§52c—§53）、第一と第二のアンティノミー、すなわち第一類のアンティノミーは、同種のものの付加あるいは分割に関わるものであるゆえに、数学的アンティノミーと名づけられる。したがってこの種のアンティノミーにおける正命題も反対命題もともに偽である。この数学的アンティノミーの誤りの原因は、自己矛盾をおかしているものが、一つの概念において両立しうるものとして表象されたという点にある。これに反して第三と第四のアンティノミー、すなわち第二類のアンティノミーは、力学的（物理学的）アンティノミーと名づけられる。この部類のアンティノミーにおいては、その誤った前提は、もともと両立しうるものが、矛盾をおかしているものとして表象されるという点にある。したがってこの場合では、単なる誤解によって互いに対立させられる主張、すなわち正・反両命題は、共に真でありうるということになる。

要するに、数学的な結合においては、結合されたもの（量の概念において）が同じ種類のものであることが必然的に前提されるが、力学的な結合の場合は、このことをまったく必要としない、ということである。なぜなら、延長をもつものの量が問題である場合には、すべての部分は、部分相互にまた全体と同種でなければならないが、これに対して、原因と結果の結合においては、両者が同種のものである場合がないことはないが、そのことが必ずしも必要というわけではないからである。

三

以上にまとめたカントのアンティノミー構図に環境問題の主要な議論を当てはめ、環境思想の全体像を俯瞰してみよう。

そのために、四つのアンティノミーの「世界」の語を「環境」と読み替えてみる。すると以下のようになろう。ただし、対立関係を際立たせるために、カント自身の元の文言を若干言いかえた。

Hosei University Repository

第一アンティノミー

正命題　環境は、空間・時間的に有限である。

反対命題　環境は、空間・時間的に無限である。

この両命題でいう環境とは、生態系（エコシステム）のことと見なす。正命題の生態系は物質的に見た場合で、反対命題の生態系はエネルギーシステムの側面から見た場合と考える（文献③）。

まず**正命題**の「環境は空間・時間的に有限である」という主張は、環境は閉鎖系であるということを意味している。閉鎖系と見なされる環境は、生態系（エコシステム）の物質面である。すなわち生態系としての環境は、物質的な循環として見た場合、地球の中に閉じ込められているということである。一般に物質的な生態系は、地球という空間の中で閉じた循環、すなわちエコシステムを形成する。エコシステムは、生物群集とそれを支える無機的環境を合わせたひとまとまりで構成されるが、その構成要素を簡略化してまとめると、一般につぎの四つの基本要素に図式化される。

(1) 無機的環境　水・土・大気などの物質、および太陽光線・熱エネルギー。

(2) 生産者　植物。光合成を行って(1)の無機物質から有機物質を生産する。

(3) 消費者　(2)の生産者がつくった有機物質を消費する。第一次消費者（草食動物）→第二次消費者（肉食動物）。

(4) 還元者あるいは分解者　バクテリア・菌類などの微生物。(2)と(3)の生産者や消費者、すなわち有機物を無機物質に還元する生物。

この生態系の循環システムは、食物連鎖あるいは生態系ピラミッド（ecological pyramid）を形成する。食物連鎖とは、上記四つの基本要素のうちとくに(2)と(3)の生物相互の間の捕食・被食関係、すなわち食う・食われる関係のことであるが、それに物質の循環、共生などの相互関係を含めてエコシステムという。捕食・被食関係で

Hosei University Repository

は、後者は必ず前者より個体数が多いため、後者を下位において前者を上位において図式化した場合、ピラミッドの形を形成するゆえに、これは生態的ピラミッドあるいは個体数ピラミッドといわれる。ここから生態的地位(ecological niche)、ハビタット(habitat)あるいはビオトープ(Biotop)、生物圏(biosphere)等、さまざまな生態学的概念が派生する。

このシステムがうまく循環しているかぎり、環境問題は生じない。しかしこのシステムの中に人間が介入して過剰な生産・消費活動の結果、循環が乱されて環境悪化の事態が出来する。物質的な生態系は閉鎖系であるゆえに、循環がうまく機能しなくなれば、環境悪化の要因が循環そのものの流れに組み込まれ、環境破壊は免れないのは必定となる。したがって、物質としての生態系に定位した環境問題の解決は、この閉鎖系というシステムの中で循環を正常に機能させるにはどうするかという方向が眼目となる。

これに対して**反対命題**の「環境は空間・時間的に無限である」という主張は、環境は開放系であるということを意味している。ここで開放系と見なされる環境は、エネルギーシステムである。正命題で見たように、環境は生態系という物質面では閉鎖系であるが、生態系に関与するエネルギーシステムは開放系と見なされる。

エネルギーとは、具体的にいえば、エコシステムの四つの基本要素のうち第一の太陽光線・熱エネルギーのことである。このエネルギーシステムは開放系であるというのは、空間・時間的に無限である(宇宙的な規模でいえば)という意味である。地球の生態系は、その活力源のほとんどを太陽光線に依存している。しかし太陽光線という形で提供される熱エネルギーがこの閉鎖系の生態系に溜め込まれて行き場がなければ、とうの昔に地球は燃え尽きてしまったはずである。しかし地球が現在も熱平衡を保って恒常性を維持しているのは、剰余の熱が宇宙空間に放出されているためである。エネルギーの流れは、図式的にみれば、地球システム、太陽系システム、宇宙システムが相互に開放されているということである。

以上検討したように、第一アンティノミーの環境問題は、一方の命題だけの視点では解決不可能であるという意味では、両命題は――カントに即していえば――ともに偽である。このアンティノミーの意味での環境問題の解決

Hosei University Repository

策は、正命題の閉鎖系を反対命題の開放系にうまく乗せるところに鍵があると考えられるが、もちろんこれは理論的な考え方であって、実践的・技術的には別問題である。

第二アンティノミー

正命題　環境におけるすべてのものは、単純な要素からなる。

反対命題　環境におけるすべてのものは、複合されている。

いまさまざまな方面で、価値観のめまぐるしい変遷、多様化が露呈している。そう思って改めて身の回りを見わたしてみると、環境の面に限定しても、それに対する見方の変化、多様性が目につく。このアンティノミーに即していえば、自然の開発か、保護か、あるいは消費の拡大か省エネルギーか、という相対立する主張である。

その観点からは、**正命題**の「環境におけるすべてのものは、単純な要素からなる」というのは、科学的な還元論（reductionism）の考え方で、自然の開発を容認する根拠とされる。この考え方を土台として成長と進歩が謳われ、ことに経済成長が企てられる。この立場によれば、自然は経済資源と見なされ、経済資源としての自然開発が促進されるが、前提となるのは人間活動の自由である。しかしそれは永遠に続くものではなく、早晩行き詰ることは目に見えている。この意味での自然は、第一アンティノミーの正命題にも関わるからである。近年持続可能性（sustainability）ということがいわれだしたのは、こうした危機感にもとづくものである。

他方、**反対命題**の「環境におけるすべてのものは、複合されている」とは、哲学的な全体論（holism）にもとづく考え方で、自然全体の権利とその保護を主張する。

しかし一口に保護といっても、その下位概念には若干ニュアンスの違う概念が含まれていて、一般に日本語で「保護」といわれる概念は、状況に応じて保存、保全、保留、回復等さまざまな類似の語彙として使い分けられている。また、英語の類似の概念にどの訳語を対応させるかという点でも、場合によってゆらぎがありその対応関係

Hosei University Repository

が定まっているわけではない。この多様な意味を簡略化して、〈～からの保護〉と〈～のための節約〉という二つの概念にまとめたのはジョン・パスモアである（文献④）。パスモアは、前者をpreservation、後者をconservationと定義した。ここでは前者に「保存」を、後者に「保全」を当てることにする。保存は生物の種や原生自然を損傷や破壊から保護することであり、保全は将来の消費にそなえた天然資源の節約を意味することと定義する。パスモアは、自然に〈関する〉（〈対する〉との違いについてのパスモアの見解は後述）人間の責任のための保存を前提にしつつ保全の必要性を強調し、その姿勢はいわば持続可能性の追求である。パスモアの姿勢は、自然そのものに権利はないが、人間が自らの生存のために自然を守らなければならないということである。この場合、自然の保護すなわち保全は手段で、その目的は人間の生存ということになる。

以上のように保存と保全は、ニュアンスは異なっても、第二アンティノミーの反対命題から大局的に見れば、「保護」という普遍概念でくくることができる。そうしてこの考え方の前提は人間活動の制約である。

以上にまとめた第二アンティノミーの正命題と反対命題の対立は、別の見方をすると環境問題のディレンマを構成する。両命題を簡略化すれば、「経済成長」か「自然保護」か、あるいは「消費の拡大」か「省エネルギー」かとなる。これを論理の形式に整理すれば、「もし経済成長を持続して人間の消費生活を満足させたいなら(A)、自然資源の開発を推進し続けなければならない(B)。もし自然の権利とその保護を主張するなら(C)、自然資源の開発を制限しなければならない(D)」となり、これは典型的な複合構成的ディレンマの形式、すなわち「AかCかである。ゆえにBかDかである」を構成する（文献①第五章）。

このアンティノミーを別の角度から見れば、「人間にやさしい」（正命題）か「地球にやさしい」（反対命題）か、すなわち還元論か全体論か（文献⑥）という対立を構成する。

以上のように見てくると、第二アンティノミーの正・反両命題も、環境問題の解決という意味では、それぞれ単独では偽であることがわかる。したがって、その場合は二者択一ではなくその融合を試みなければならない。

まず「経済成長」か「自然保護」か、という面では、問題は「経済成長を維持しつつ自然を保護する」という両

Hosei University Repository

立しがたい使命をどう解決するかということである。このアンティノミーあるいはディレンマの解決策として考えられたのが、環境を破壊することなく自然資源の利用をどのように持続させるかという視点であり、これが近年とくに論じられることになった持続可能性である。

また「人間にやさしい」か「地球にやさしい」かという側面では、この両命題の二者択一が成立しないとすれば、この問題の難点を解消するためには、両者を並列させるのではなく、手段と目的の関係におくことが考えられる。ここで「地球」とは、言いかえれば「環境」ということで、この概念にはもともと人間の価値が含まれ、価値から離れた概念は事実概念すなわち「自然」である。「自然」を人間と他者との関係の場と考えるかぎり、それは「環境」概念に転化し、そこには単に〈ある〉という事実概念ではなく、〈あるべき〉という価値概念が含まれる（文献①第四章）。したがって、環境問題には必然的に人間の価値観が含まれているとすれば、この問題は人間を除外しては成り立たない。それゆえ、環境はまず「人間にやさしい」のでなければならない。しかし、もしこの点のみに専念するなら、視野が狭くなって、〈木を見て森を見ず〉の事態に陥らざるをえず、自らが拠って立つ場所の地盤が危うくなる。そこで森を見る視点がなければならず、それが「地球にやさしい」ということである。前者を支えるのが還元論で、これを手段・方策とするなら、後者を支えるのが全体論で、これが人間にとっての目的・理念である。ここに科学（方策）と哲学（理念）の役割分担が機能することになる。

第三アンティノミー

正命題　環境には自由による原因がある。

反対命題　環境には自由というものは存在せず、すべてのものは必然的な自然法則によって生起する。

正命題にいう「環境には自由による原因がある」とは、人間の意志が自然に介入し、そこから新たな因果関係がはじまることと考える。ここでの「環境」とは、事実概念としての「自然」に人間の意志が介入して価値概念に転

Hosei University Repository

化した状況と解釈する。それゆえ、この正命題の根拠は、倫理学説にいう自由意志論（非決定論）である。自由とはあくまでも人間の資質であるから、ここでの主張は人間中心主義であり、環境における人間の自由の可能性の保証、道徳・倫理の基盤の確保である。したがってここでの主眼は、人間の自然からの超越の立場から、人間の倫理学的覚醒による環境問題の解決である。

この人間中心主義倫理の典型はカントの説で、その主張は、定言命法のうちとくに目的自体の方式「汝自身の人格の中にも他のすべての人格の中にある人間性を、単に手段としてではなく、つねに同時に目的としてあつかうように行為せよ*」（「道徳形而上学の基礎づけ」第二章）に集約される。またカントは、目的をたてる唯一の存在は人間であるといい、つぎのようにいう。――「人間は、悟性をもち自分自身に任意に目的をたてうる地球上の唯一の存在者として、たしかに自然の歴とした主人であり、自然が一つの目的論的体系と見なされるときには、人間の使命から見て自然の最終目的である」（「判断力批判」§83）。これに義務の概念を導入してさらに端的に表現して、「単なる理性に従って判断すれば、人間は、ただ人間（自分自身あるいは他人）に対する義務よりほかにはいかなる義務ももっていない」（「道徳の形而上学」第二部§16）と説く。

* カントの道徳的命法の議論は錯綜しているが、定言命法の基本方式とそのヴァリエーションとの関係については、「カントの定言命法とその諸方式について」（法政大学教養部紀要」第六六号、一九八八年）でまとめて論じた。目的自体の方式についても、ここに引用した基本方式以外に、そのヴァリエーションとして四種が数えられる。

こうしたカントの所論から導かれるのは、人間は目的存在としての人間に対して、すなわち自分自身と他人に対してのみ道徳的な義務を負うということで、そうした義務は自然の被造物にはおよばないということである。しかしカントは自然破壊や動物虐待を是認しているのではなくて、こうした行為は人間の自分自身に対する義務に反することだと主張する。これについては、たとえば「自然に見られる、たとい生命はなくとも美しいものについていえば、それをいたずらに破壊しようとする性向は、人間の自分自身に対する義務に反している」（「道徳の形而上学」第二部§17）といい、また「被造物のなかで、理性はないけれども生命はもっている部分についていえば、動物を

Hosei University Repository

暴力的にまた残酷にあつかうことは、人間の自分自身の義務に一層反している」(同上)ともいっている。

カントのこうした所論を的確に解釈したのはつぎの文言である。――「カントは、すべての義務は人間に対する義務であって、自然や動物に〈対する〉義務だと思っているのは、実は、自然や動物に〈関する〉自分の義務を勘違いしているにすぎない、と明言しています。カント主義の義務論に厳格に従うならば、人間非中心主義の環境倫理はすべて、自然に〈関する〉義務を自然に〈対する〉義務と思い違いをしている、ということになるでしょう」(文献⑦)。

このように、動物の虐待(ひいては自然破壊)を避けるべきなのは、それら自体の権利のためではなくて、そうした行為があくまでも人間の道徳性を損なうから悪いのだ、という考え方は、環境問題がいわれるようになる以前の西洋思想に一般的に見られる。たとえば、ジョン・ロックはつぎのようにいう。――「もし子供たちがこのような残酷さ〔非力な動物たちを乱暴に扱うこと〕の傾向を持っているなら、その反対の取扱い方を教えてやるべきです。というのは、動物をいじめたり殺したりする習慣は、次第に彼らの心を人間に対してすら冷酷にさせるからですし、また人間より劣った生物を苦しめ、殺して喜ぶ者は、自分と同種族〔人間〕の中の劣ったものに対して、非常に情愛深く、優しいことは、あまりないことですから」「子供たちは、初めからいかなる生き物も殺したりいじめたりすることを嫌悪するように育てるべきで、またどんな物でも、もっと高貴なものを保護するためとか、あるいは役に立つのでなければ、損なったりこわしたりしないように教えるべきです」(『教育に関する考察』§116、第一一章、服部知文訳、一九六七/一九八八年、岩波文庫)。

ロックのこうした主張の根拠は、明らかに動物の自然権の擁護のためではなく、動物を虐待することは、そうした行為をする人間の道徳性に悪影響をおよぼすというところにある(文献⑧)。

ロックもカントも、以上に吟味したように、自然に一定の配慮はするが、その配慮はあくまでも人間の道徳性のためであって、その意味では人間中心主義にとどまる。

こうした「自然に〈対する〉人間の責任」と「自然に〈関する〉人間の責任」の違いを明確に指摘したのはパス

Hosei University Repository

モアである。すなわち

この本の標題〔*Man's Responsibility for Nature*〕は、しばしば自然に〈関する〉(for) 人間の責任ではなくて、自然に〈対する〉(to) 責任として、間違って引用される。違いは根本的である。「自然」は、それに対して人間が慈善団体であるかのように責任を負うべき擬似人間ではない。人間は自然に〈関する〉責任を有するのである。それは第一に、人間の行為が、生物圏における多大な変化、人間の活動の本性における変化から浮上する変化に関して因果関係的に責任を負うという事実に起因する。もちろん人間は自然の部分を形成する。そのかぎりでは、人間は生物圏の存在物に関する (for) 責任をもたないばかりか、生物圏を支配する何らかの意味での全体的な制御力も有しない。しかし人間は、全く根本的な責任という点で、生物圏の他の構成物とは異なっている。間違いなく、私たちは、さまざまな形の人間の排出物のような人工の汚染について考えることができる。自分の排出物の内容を変えることができない他の生物種もいれば、この排出物に対して徐々に自分自身を順応させてきた生物圏の彼らの仲間もいる。しかし人間は、とりわけ工業化社会を発展させてきたので、著しい度合でかつ非常に急激なやり方で、そうすることができる。第二に、他の生物種には不可能だけれども、人間には、他の生物種が「排出」したものを調査し、その形を変化させることを試みる能力がある。そして第三に、このような必然的な責任は、人間の場合には、人間種以外には適用されない概念である道徳的な責任を惹き起こす。エコロジストは、正しくも人間と他の種の類似点を強調する。しかし人間だけが「環境哲学」(ecophilosophy) を展開する必要性をもつか、それともそうする可能性をもつ。(文献⑤p.xii)

ここにパスモアの人間対自然の関係の基本的な姿勢が凝縮されている。これで見るとおり、パスモアは本質的にはロックやカントの人間中心主義を踏襲している。この基本姿勢を敷衍していえば、パスモアの主張は、自然中心主義者（エコロジスト）が主張するような自然の権利などは無意味であり、自然に対する新しい道徳的配慮を導入

Hosei University Repository

する必要はないということである。もちろん自然の破壊は人間の生存そのものを脅かす愚行であるから、それを阻止しなければならない。しかしそれは人間の、権利主体としての自然に〈対する〉責任ではなくて、あくまでも人間の未来世代のための資源の「保全」という意味での自然に〈関する〉責任である。

以上の正命題に対して、**反対命題**にいう「環境には自由というものは存在せず、すべてのものは必然的な自然法則によって生起する」は、科学的因果決定論の根拠である。この科学主義にもとづく論者は、自然中心主義を標榜し、人間は自然の一部分であると主張する。この立場に立脚すれば、人間は自然から超絶した特別な存在ではなく、あくまでも人間を自然の中においてそれと同等の位置を占める。したがって、環境問題はその枠内で解決が図られなければならない。

主な論者に、「土地倫理」(land ethic) を提唱したアルド・レオポルド (『野生のうたが聞こえる』)、「創世記」の文言を根拠にして、ユダヤ・キリスト教の――ひいてはそれを土台とする西洋思想の――人間中心主義を告発したリン・ホワイト・ジュニア (『機械と神』)、動物の権利を主張したピーター・シンガー (『動物の解放』『動物の権利』)、「ディープ・エコロジー」を唱えたアルネ・ネス*やその理論を踏襲するディープ・エコロジストたちがいる。さらにもっと過激なのは、一連の自然の解放主義者であり、アメリカの急進的環境主義者である。その典型的な一派は、たとえば、グリーンピース、シー・シェパード・コンサベーション協会、アース・ファースト等であり、アナーキズムと結びついた過激な環境主義運動である (この辺の詳しい事情については文献⑧参照)。

* 先に正命題の論者の一人として取り上げたパスモアは、ネスの「ディープ・エコロジー」を引き合いに出しながら、自らの立場をつぎのように述べる。――「しばしば引用される論文において、ノルウェーの哲学者アルネ・ネスは、彼のいう〈シャロー〉(shallow) な環境哲学と〈ディープ〉(deep) なそれとを区別した。彼によれば、〈シャロー〉な環境哲学者は自分たちの関心を資源の保全と汚染の削減に制限するが、それもそれらが先進国の市民の健康と財産に影響する限りにおいてである。私は『自然に関する人間の責任』で、私自身が〈シャロー〉な環境哲学者であることを折にふれてほのめかしたが、しかし私の環境哲学に関する次作では、私は〈ディープ〉の兆候を示す。この二つを区別する解釈を私は拒絶する。私は、関心を裕福な国に制限するのでもなければ――それは〈発展途上国〉の指標へほんの一瞥していることからでも明らかである――動物の種や原生自然の破壊を、無関心を装って省みないというのでもない」(文献⑤ p.viii)。

Hosei University Repository

正命題と反対命題の対立は、要するに自我（人間）と自然の対立であり、デカルト的な二元論を表していると見られる。環境問題を解決するためには、両命題がお互いに自らの立場に固執していては不可能で、何らかの方策でこの二項対立を解消しなければならない。

しかしこの第三アンティノミーの正・反両命題は、カントの見方に従えばそれぞれ真でありうる。この両命題は、双方の単なる誤解によって互いに対立している主張だからである。したがって双方の誤解を解くためには、正命題の人間中心主義と反対命題の自然中心主義（人間非中心主義）との融合点を探り出さなければならない。

その方策の道を開くのは、カントの自我（人間）と自然との融和の試みにあると考えられる。カントは『実践理性批判』の終結部をつぎのような名高い一節で締めくくっている。――「繰り返し熟考すればするほど、つねに新たにそしていや増す感嘆と尊敬の念をもって心を充たすものが二つある。すなわち私の上にある星をちりばめた空と、私の内にある道徳法則とである」。ここで「私の上にある星をちりばめた空」は自然の象徴であり、それを自然の原理とすれば、「私の内にある道徳法則」は自我の原理である。自然と自我がカントにおける世界の二つの原理である。自然の原理を基礎づける試みが『純粋理性批判』であり、自我の原理を論ずるのが『実践理性批判』である。しかしカントによれば、この両者は対等なものではなく、自我としての人間にとっては内なる世界すなわち道徳の確立が目的であり、そのための手段として外なる世界すなわち自然認識がある。要するに、自然（私の外なる世界）と自我（私の内なる世界）とは、手段と目的の関係になっているということである。カントは、この第一批判と第二批判によって、自然の認識を司る理論理性の限界を定め、その根底に自我の原理としての実践理性の役割があることを論証したのである。この自我と自然の総合の試みが、カントの主著、すなわち上記の二書に第三批判『判断力批判』を含めた三批判書の、ひいてはその哲学全体を貫く主題と見なすことができる。

こうしたカントの議論を援用していえば、手段（自然）と目的（自我）はそれぞれ真であるが、しかし各々単独では意味をなさない。すなわち自然は従として、自我は主として関係づけられてはじめてそれぞれ正常に機能するということである。

Hosei University Repository

本来、人間は日常の営みの中で目的と手段をもつ。手段を追究するのは科学であり、これがもたらす高度な技術力によって人間の生活の基盤が作られる。しかし手段はそれだけでは意味をなさず、字義どおり何かをめざすために存在する。そのめざされるものは目的といわれ、それを考えるのが哲学であり倫理学である。その役割は、人間にとって一般的なよりよい生き方の追究である。そのよりよい生き方を個別の分野で考えるのが、応用倫理学としての環境倫理学である。

このように正命題と反対命題との関係を、前者を目的、後者を手段として見てくると、環境問題は、結局は人間中心主義*にならざるをえない。「環境」とは善き生活の場のことであり、事実概念としての「自然」を「環境」と言いかえたところに人間の価値概念が導入され、価値とはまさに人間の善きこと、すなわち目的にほかならないからである。

＊　ここで人間中心主義といっても、すでに吟味してきたように、単純に既存の人間優位という意味での考え方ではない。人間は自らを外なる目で視るメタ存在として、「人間を含んだ自然」と「人間の中に含まれた自然」を同時に〈自己言及〉しなければならない存在として自覚する、という意味での人間中心主義である（この議論と〈自己言及性〉については、文献①第四章参照）。

第四アンティノミー

正命題　環境の因果性の系列には、何らかの絶対的な存在者がある。

反対命題　この系列には、絶対的なものは何もなく、すべてが偶然的である。

正命題の「環境の因果性の系列には、何らかの絶対的な存在者がある」とは、ここでは絶対主義ないしは全体主義に立つ宗教的な世界観のことと考える。すなわち、地球全体を躍動的な有機体と見なし、自然の認識にはたらく理性の土台に、崇高さ・敬虔な感情をおくものの見方である。

その典型的な考え方として、ここではイギリスの化学者ジェームズ・ラヴロックが唱えた「ガイア仮説」（Gaia

Hosei University Repository

hypothesis）を当ててみよう（文献⑨⑩）。ラヴロックは、地球全体を生命体とみなし、その意味での地球をギリシャ神話にいう大地を擬人化した女神「ガイア」と命名し、その構造を生化学的に理論づけた。その理論の骨子については、ナッシュによる紹介が簡にして要を得ているので、それを援用する。――「この惑星は、自動制御する環境をつくってきつつ現在もそれを維持しており、この環境は、その構成要素である生命体を支えるだけでなく自らも生きている。こうした考え方からすれば、〈ホモ・サピエンス〉のような個々の存在や種も、細胞や器官がそれら自身の身体に対してもつ関係と同じように、地球に対しても不可分の全体の部分を構成する。したがって、脳細胞や肝臓をその生命を支える有機体全体から引き離して評価したり配慮したりすることが無意味であるように、適正な環境倫理は、全体である地球に価値を与えるよう要求する。人類は、この地球という共同体のなかで唯一の道徳的な意識をもつ構成員、すなわちガイアの脳細胞であるから、いわば自分たちが属する地球という存在の幸福を持続するために自制という独自の能力をもっているのである」（文献⑧訳書三七〇頁）。

ラヴロックのガイア仮説を取り入れて、独自の環境論としての「自己生成する地球」論を展開したのは森山茂である。森山は、ラヴロックの嫌った、一般に流布している強いガイア仮説すなわち「目的論的なアニマ性」を廃し、H・R・マトゥラーナおよびF・J・ヴァレラのオートポイエーシス論を取り入れて新しい生命システム論を企てた。彼は、ラヴロックのいうガイアを〈自己言及的な〉場所の総体とみなし、つぎのようにいう。――「自己言及的な場所とは、力動的な無限を成立させるような場所をいい、それがまた地球生命圏という場所の場所性なのである。このような特異な場所がどうして地球に存在するのか？　それは地球に生命が存在し、地球が生命のなす系、超生命システムであり、単なる〈ものシステム〉ではないからである。地球は〈地球生命圏〉という、生命が作り出した〝場所〟なのである」「たとえば、真核細胞という場所は原核生物の共生による所産である。その場所で原核生物は自分たちを画していた壁を取り払い、両者が共有できる場所に自己を溶け込ませた。だが、その場所はもともと彼ら自身によって作られたのである。他方で、それはその場所の外では起こり得ないから、彼らの共有する場所が生み出したものである。こうして原核生物が共生としての新しい場所（環境）を創造し、その環境が真

Hosei University Repository

核生物という新しい生命を生み出した。さらにその真核生物が共生することによって新しい環境が生まれ、同様の創造的な動きにより新しい生命が生まれる」「このような創造的な力に満ちた自己言及的な場所の総体、それが地球生命圏である。〈生成〉はこのような自己言及的な無限をもつ場所の本質的性質から生じる。これは生成論の最も重要な点であり、なぜ超生命システムが自発発展してゆく動きをもつのかという問に対する答なのである」(文献⑪一二一頁以下)。

要するに森山によれば、地球のもつ最大の特質は〈生成する惑星〉であり、それは絶えず新しい何かを生み続けることによって、自己と全体とを更新していく〈自己言及性*〉をそなえた存在なのである。この地球という惑星のもつ自己言及的に生命を作り出すネットワークが、生成する場所を絶えず生み出し続けるということである。ここに見られる地球全体を躍動的な有機体と見なす立場は、第四アンティノミーの正命題の典型的な考え方である**。

* 〈自己言及性〉については、筆者はすでにさまざまな局面について詳しく論じた(文献①)。とくに環境問題における〈自己言及性〉の視点については、第四章と第五章で吟味した。

** こうした世界把握については、別の方面からも言及されている。一九世紀のドイツ・ロマン主義の画家、アルノルト・ベックリーンはつぎのようにいったと伝えられている。――「地球全体が一匹の大きな動物であって、われわれはその背に寄生している生物にすぎないのではないかということを、一体われわれは知っているのであろうか」。この文言の引用者はつぎのようにコメントしている。「換言すれば、人間ははばかることなく、自己の存在基盤を容赦なく食い物にしているのである。――これはまことに今日的な図である」(フランツ・ツェルガー『ベックリーン《死の島》』高阪一治訳、一九九八年、三元社、四九頁以下)。

第四アンティノミーの正命題に対して、**反対命題**にいう「この系列には、絶対的なものは何もなく、すべてが偶然的である」とは、相対主義に立つ科学主義の世界観である。この見方においては、あくまでも科学精神の基盤である還元論に則り、因果関係による解決をめざす。

正命題の典型として見てきたガイア仮説は、この科学主義の立場からは当然のことながら一蹴される。その理由について、先に言及した森山は、ガイア仮説の生命観によって近代科学を支えてきたダーウィニズムのもつ「機械

Hosei University Repository

論的な生命観」が否定されるからだという。その間の事情について森山はつぎのようにいう。

〔ガイア仮説のいうように〕環境創生への生命圏の積極的な関わりに着目することは、注目に値する思想だと考える。なぜなら、それは長らく近代思想を支えてきたダーウィニズムを打破するまったく新しい考えだからである。ダーウィニズムでは、生命にとっての環境とは、単に自身が生み落とされたところの世界であり、与えられた世界にすぎない。「適者生存」の言葉が示すように、環境に試され適した生物のみが生き残ると考えてきたのである。だから、その基本となる思想の中には、生命とは積極的に環境をも作り変えていく存在であるという見方はなかった。生命による積極的な環境創生の導入という意味で、ガイア論の登場は歴史的な意義をもつといわねばならない。一般の科学者たちが示す過敏ともいえるガイア論への拒絶反応は、このようなガイア論によるダーウィニズムの基底へのゆさぶりに対する衝撃ととまどいの反動であろう。(文献⑪一三頁)

ガイア仮説批判の代表者として佐倉統の議論を取り上げてみよう(文献⑥とくに「第三章・3さらばガイア」)。その骨子は、ダーウィニズム進化論の立場に立つ批判であり、その矢面に立つのはガイア仮説の「地球生命体論」と反還元論的な全体論思想である。佐倉は、ガイア仮説の論理構成と記述の大枠の正しさは認めつつも、それがもつ負の影響が大きいゆえに批判するという。ガイア仮説の負の影響とは、「地球にやさしい」とか「環境にやさしい」というキャッチフレーズの欺瞞性を覆い隠してしまうことだ、という。佐倉にとって環境問題の目的は、人間の生活をどうするかであって、「地球にやさしい」ではない。その主張に立脚するガイア仮説批判の論理構造をまとめるとおよそつぎのようになる。——ガイア仮説の加担者の主張の目的は、「地球にやさしい」「環境にやさしい」である。そのための手段としては、破壊の元凶である人類を一掃すればいい。その手段の実践は、環境破壊の現状に何も手を打たないことだ。その結果、手段の達成として、いずれ人間が生存できなくなる。その帰結として、地球・環境の総体としての「ガイア」のみが生き残るという目的が達成される(八二頁以下)。

Hosei University Repository

以上の議論展開は、その論理構造は正しくとも、それぞれの項目がはたして本当にガイア仮説論者の主張なのかどうかについては吟味の余地があるが、ここでは議論が本題から離れるので問わない。たしかに、反対命題の主張を前提すれば、このような結論は可能である。しかし、論理とは各命題の中身を仮に真と認めればその「形式」としての構造は「正」すなわち妥当というだけのもので、そもそも命題の「内容」が「真」かどうかは別の問題である。

カントのアンティノミー論に即していえば、この第四アンティノミーの正・反両命題はともに真でありうる。それぞれの前提を真であると認めれば、そこから導かれるそれぞれの世界観もまた真であることが論証されるからである。しかし前提どうしは当然のことながら相容れないから、したがってその結論である世界観も相対立する。単なる世界観の論争にとどまっているだけなら、両論は歩み寄る必要はない。しかしこと環境問題に関するかぎり、両者が自説にこだわって議論を続けていても実りがない。ここでは〈自己言及性〉の概念を導入して、正・反両説の融合を試みてみよう。

佐倉は、反対命題の論拠であるダーウィンの進化論に立ちながらも、この融合の可能性と解釈される独自の議論を展開している。佐倉は、人間と自然との関係について、旧来の自然観である人間・自然という二項対立を廃して、人間を含んだ形で自然を理解すること、しかもその人間の中には自然が含まれているということを知るべきだと主張する。すなわち、自然の中では人間は一つの要素にすぎないが、その自然は人間の中の一つの要素にすぎないということである。そして佐倉は、さらにこの自然は、唯一客観的な存在ではなくて、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの概念を援用して、それぞれの生物の体制による環境世界のことであるという。ここで人間が「人間を含んだ形での自然を理解する」視点を〈自己言及性〉と見なせば、そのような原理は要素間の関係の相互性による場所を形成する。したがってこの場所は、すでに古典力学の空間でもダーウィン進化論の器としての静的な生息場所でもなくて、要素の関与とともに相互形成される動的な環境である。しかも佐倉によれば、人間の中に含まれる自然とは、具体的には遺伝子であり、したがってその情報伝達によって成り立つ場所は重層構造をなす。

Hosei University Repository

このような視点を敷衍すれば、場所とその中の諸要素（人間と自然）とは相互に独立の存在ではなく、要素と要素との相互関係が有機的な場所をつくることになる。そうなら、この自然と人間との相互関係によって成り立つ重層構造の場所をそのように認識する人間は、メタ存在でなければならない。このメタ存在としての人間が重層構造としての場所に関与することこそ、〈自己言及性〉にほかならない。言いかえれば、人間はメタ存在として、「人間を含んだ自然」と「人間の中に含まれた自然」を同時に〈自己言及〉しなければならない存在だということである（文献①第一章・第四章）。こうしてメタ存在の〈自己言及性〉の視点で正・反両命題は融合することになる。

ユクスキュルは「環境世界」(Umwelt) という考え方を提唱して、動物の認知世界を読み解く（文献⑫）。そして、およそ動物にはそれぞれの種独自の生息場所としての環境世界があり、同じ一つの対象物と思われるものでも、それぞれの種の体制によってまったく異なって知覚される、と主張した。したがって、この世界は唯一客観的な世界などではなく、それぞれの生物が、それぞれの種の体制に即して、自らを中心として描く環境世界なのである。ユクスキュルによれば、それでもなお、すべてを包括している客観的な宇宙というフィクションにこだわるとすれば、それはただこのような古くさいフィクションの助けを借りるほうが、お互いに話が通じやすいからというだけのことなのである。* ここにいうフィクションとしての客観的世界を約束ごととしての共生の場とみなせば、そこに生息するすべての生物を包み込む有機的な場所をガイアと名づけることも可能であろう（文献①第一章・第四章）。

* ユクスキュルによるこの間の事情についての主張を補足しておこう。動物は単なる客体ではなく、知覚と作用とをその本質的な活動とする主体と見なされる、といったあとつぎのようにいう。――「そうなれば、環境世界へ通じる門はすでに開かれていることになる。なぜなら、主体が知覚するものはすべてその知覚世界 (Merkwelt) になり、作用するものはすべてその作用世界 (Wirkwelt) となるからである。知覚世界と作用世界が連れだって環境世界 (Umwelt) という一つの完結した全体を作りあげているのだ」。なおまた、カントの感性のア・プリオリな直観形式としての空間・時間論を援用してつぎのように説く。――「生きた主体なしには空間も時間もありえないのである。これによって生物学はカントの学説と決定的な関係をもつことになった。生物学は環境世界説で主体の決定的な役割を強調することによって、カントの学説を自然科学的に活用しようとするものである」。（引用は新訳によったが、Umwelt は旧訳のまま「環境世界」とした。）

Hosei University Repository

しかしたしかに、地球を生命体と見なすガイア仮説は、自己複製するという生命体（生物）の定義を援用すれば当然批判される。しかしこのようにガイアに生物の定義を厳密に適用しなくとも、もっとゆるく広い意味での有機体と解釈すればとくに問題視することはないのではないか。* すなわちここにいう有機体とは、一つの組織体を構成する各部分が、一定のまとまりの下に統一され、部分と全体が必然的かつ不可分な関係を有するもののことである。地球は自己複製しないから生物ではないというのは、一歩譲って、科学理論としてはそのとおりだとしても、地球をそのように見なすことによって環境意識を喚起することになれば、その意図は達せられる。ガイア仮説はそれ以上のものでもそれ以下のものでもないと考える。すなわち、ガイア仮説を環境意識改革と考えれば、十分にその意義はある。環境意識への覚醒と考えれば、その科学的欠陥を暴き立てることはない。

* ラヴロックは、生命の定義についてつぎのようにいう。――「生命とは何かを科学的なことばで説明することができない。〔略〕わたしのみるかぎり、これまで生命の定義に成功した人間はひとりもいないのだ」（文献⑩）。

ガイア仮説で論じられる地球の恒常性について、もう少し検討してみよう。ラヴロックの言に俟つまでもなく、一般に生命を一意的に定義することはむつかしいとされるが、生命体すなわち生物については、その特質として、ふつうは自己複製能力、物質代謝（metabolism）能力、恒常性維持能力が挙げられる。E・シュレーディンガーは、生命における恒常性をとりあげておよそつぎのように述べた。すなわち、生命とは、すべての物質現象が避けることのできないエントロピー増大の法則に逆らって、秩序を維持しようとするシステムである、*と（文献⑬）。恒常性をこの意味で考えれば、ガイア仮説における地球を生命体とする解釈は成立すると考えることができる。

* なお、鎮目恭夫は、シュレーディンガーの見解を敷衍してつぎのようにいう。――「そもそも〈生命〉という名詞は〈生きている〉という形容詞または述語を名詞化した言葉だ。そして、今日われわれは、生物の個体の生命はどこにあるかを問う場合には、それは当の個体の身体の内部にあるのではなく、身体とその環境とからなる世界全体の中にあるという考えに十分注目することが必要だ。さもなければ、少なくとも環境問題に適切に対処することはできない」（文献⑬「訳者あとがき」）。この生命観は、図らずもガイア仮説を援護するものであろう。

Hosei University Repository

ガイア仮説は科学理論として検証できないから疑似科学だという批判に対して、科学的確実性ということについてもう少し考えてみよう。科学は、それが前提とする本質的な規範によって、個人の主観的憶測や一回限りの事態は取り上げない。そして事実の観察から導かれた仮説は、いつでもどこでも誰によっても実験によって検証されなければならない。さらにこうして構成された考察は、抽象的に数理的モデルとして理論化される。そこに求められるのは事実を支える普遍的構造であり、個々の事実はその特殊事例である。すなわち、科学はある現象を解明するのに、その因果関係を観察・実験し、仮説を作ったうえで、その仮説を観察されたのと類似の現象に戻って検証する。もしその仮説がそれらの現象を残りなく説明するなら、その仮説はとりあえず法則として認定される（この辺りの科学方法論については、文献⑭を参考にした）。

その点から改めてガイア仮説を吟味してみると、ガイア概念は、科学（化学・生物物理学）者ラヴロックが綿密な科学的観察にもとづいて地球の恒常性をモデル化して導いた仮説であり、それをその仮説を支えたのと類似の事実に戻って検証することはできる。そこまでは科学である。したがって、地球の物質循環系の恒常性から、ただちに地球は生命体だという結論を導くのは科学的には論理の飛躍であろう。しかし、地球の恒常性をこのように解釈するのは科学ではなく、哲学の問題なのだとすれば問題ないのではないか。地球は一回限りないしは一個かぎりの「具体的個物」である。だから、もちろんその個物の内部に立ち入って、それを構成するさまざまな事象を科学的に研究することは可能であるが、それを全体として「科学的」に解明することは不可能である。それを可能にするためには、研究対象を一つの事例とする類似の複数の事例がなければならないが、地球は一個かぎりの「具体的個物」だからである。もし科学が一回限りの現象は取り上げないというなら、また、もし科学が仮説の検証不可能をもって科学理論でないというなら、宇宙論は科学理論ではないことになってしまうのではないか。

その意味で、科学によって導かれた理論あるいは仮説を、哲学的に解釈する道は開かれている。ガイア仮説は、科学から導かれた仮説の哲学的な解釈であるとみなせば、そこに存在意義が認められる。たとえば、ガイア仮説を理解するのに、ライプニッツのモナド論にもとづく宇宙の「予定調和説」と比較してみよう。ライプニッツのモナ

Hosei University Repository

ドは宇宙を構成する精神的実体であるが、それを科学的に検証することはできない。それゆえに、これはまったき哲学説である。ガイア仮説では、地球は物質循環系の恒常性を保つという考えは検証できるから科学理論であるが、その先の、だから地球は生命体であるというのは哲学説である。ライプニッツの理論は、最初から演繹による哲学的な論理構成をなしているが、ガイア仮説の場合は、最初は帰納による科学的な探究であるけれども、その結論（仮説）の解釈に演繹を持ち込んだ哲学説である。ここに知的領域における科学と哲学との本質的な関係を見ることができる。

結局、地球を環境問題としてとらえたときに、その考え方あるいは意識改革として、ガイア仮説を役立て、環境悪化の対策としてダーウィン進化論にもとづく科学技術を導入すれば、両者は両立する、すなわちこれらの考え方は共に真とみなすことができるのではないか。

四

以上、錯綜した環境思想の全体像の見通しをよくするために、カントのアンティノミー論を援用して、環境思想のアンティノミー構図として整理してきた。今度は見方を変えて、多様な環境思想を以上の考察とは別の次元から具体的な主張に目を転じて見ると、つぎのような新たなアンティノミー構図が現れる。

正命題　環境問題全般に対する危機意識にもとづく深刻派の主張。

反対命題　正命題に対する懐疑的、批判的な反論。

正命題は、生活環境の世界的な悪化について警告を発し、さまざまな情報メディアを駆使して喧伝する。環境悪化に対する先覚者による警告は、世界的に一九六〇年代になって徐々に高まってくるが、そうした動きに呼応し

Hosei University Repository

て、一九七〇年代に入ってさまざまな環境問題に関わる多様な文献が相次いで登場している。こうした流れのなかで、これまでに出版されたさまざまな文献によれば、その論調は、初期の穏やかなどちらかといえば情緒的な筆致からはじまり、現在ではかなり深刻な現状告発の状況を呈している。

そこで危機意識を前面に押し出して論じられる主な環境問題として、地球温暖化、CO_2の増加、異常気象、化石燃料の枯渇、代替エネルギー開発（バイオ燃料・風力発電・太陽光発電、等）、大気汚染、オゾン層破壊、酸性雨、有害廃棄物の処理、ダイオキシン、環境ホルモン、リサイクル、生態系の破壊、生物多様性の危機、森林面積の減少、熱帯雨林の消滅、砂漠化、等がある。これらの問題は、もちろんそれぞれ単独で現れる現象ではなく、相互に複雑に関係し合い複合している。しかしこれらの問題も、時代の流れに沿って栄枯盛衰を免れず、いつの間にかメディアから消え去ったものも少なくない。

反対命題に関する文献は、ことに一九九〇年代から目立ちはじめ、以後現在にいたって正命題に対する反省、批判、懐疑の論調が多産されるようになった。

これらの議論を順不同で並べれば、地球温暖化とCO_2の増加の因果関係を疑うあるいは否定するもの、異常気象や地球温暖化は人類のせいではなく、長期的な天然周期による自然変動であるとするもの、温暖化より寒冷化のほうが人類にとっては脅威であるとするもの（事実十数年前にはむしろ寒冷化が警告されていた）、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）等によるコンピューター予測モデルは、インプットするデータに左右されるため、本質的に信用できないとするもの、京都議定書は無効であるとするもの（もしこれを完全に実施しても、二一〇〇年に〇・一五℃気温が下がるだけ）、代替エネルギーの開発には莫大な化石エネルギーを消費し、ことにバイオ燃料の開発によって食糧危機が起こるとするもの、リサイクルは根本的に間違っているとするもの、等々である。

こうした別次元のアンティノミーについては、ここでは問題点を指摘するにとどめ、今後の課題としたい。

Hosei University Repository

【文献】

①竹内昭『〈自己言及性〉の哲学――知の枠組み転換のために』二〇〇二年、梓出版社
②*Kant's gesammelte Schriften*, hrsg. von Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Druck und Verlag von Georg Reimer, Berlin / Walter de Gruyter & Co., Berlin & Leipzig, 1900ff.『カント全集』全一八巻、高坂正顕・金子武蔵監修、原佑編集、一九六五／一九七五～一九八八年、理想社
③立花隆『エコロジー的思考のすすめ――思考の技術』一九九〇／一九九二年、中公文庫
④パスモア『自然に対する人間の責任』(原著第一版、一九七四年)間瀬啓允訳、一九七九／一九八〇年、岩波現代選書
⑤Passmore, John: *Man's Responsibility for Nature*, Second edition, Gerald Duckworth & Co. Ltd., London, 1980.
⑥佐倉統『現代思想としての環境問題』一九九二年、中公新書
⑦丸山徳次『〈人間中心主義〉の再考と道徳多元論』『岩波応用倫理学講座2環境』二〇〇四年、岩波書店
⑧Nash, Roderick Frazier: *The Rights of Nature, A History of Environmental Ethics*, The University of Wisconsin Press, 1989. ナッシュ『自然の権利』松野弘訳、一九九九年、ちくま学芸文庫
⑨Lovelock, J. E.: *GAIA, A New Look at Life on Earth*, Oxford University Press, 1979. ラヴロック『地球生命圏――ガイアの科学』スワミ・プレム・プラブッダ訳、一九八四／一九九一年、工作舎
⑩Lovelock, James: *The Age of GAIA, A Biography of Our Living Earth*, Oxford University Press, 1988. ラヴロック『ガイアの時代』スワミ・プレム・プラブッダ訳、一九八九／一九九三年、工作舎
⑪森山茂『自己創生するガイア――生命と地球は共生によって進化する』一九九七年、学習研究社
⑫J・v・ユクスキュル／G・クリサート『生物から見た世界』日高敏隆・野田保之訳、一九七三／一九七五年、思索社／日高敏隆・羽田節子訳、二〇〇五年、岩波文庫
⑬E・シュレーディンガー『生命とは何か』岡小天・鎮目恭夫訳、二〇〇八年、岩波文庫
⑭小林道夫『科学の世界と心の哲学』二〇〇九年、中公新書

二〇〇九年八月下旬脱稿

(哲学・法学部教授)